

大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編  
『近代仏教スタディーズ——仏教からみたもうひとつの近代——』

法藏館、2016年4月刊、A5判、298頁、2,484円  
福井 敬\*

## 1. 本書の構成と概要

本書は、「近代仏教研究が一種のブームと評される状況になっている」[276頁]なかで「一過性のブームに終わらせるのではなく」[同上]、より多くの読者に「近代仏教のおもしろさを伝えたい」[274頁]という思いのもと、29名の執筆者が集結し編まれた近代仏教史研究の入門書である。以下では、各章の概略を紹介したうえで、本書の特徴を述べてみたい。

第1章では、まず近代仏教の定義に関する議論を整理したうえで、「仏教の近代化」の指標を整理することを試みている。その指標として、①西洋化、②学問化、③個人的な内面的信仰の確立、④社会活動の展開、⑤近代仏教思想と政治的イデオロギー、⑥仏教系新宗教の成立、⑦民俗の再編、⑧伝統教団の教団制度の形成、⑨先祖觀と先祖供養の編成、⑩グローバル化、⑪植民地主義の11点を挙げている。この11の指標は、近代仏教の特徴を端的に把握しているとともに、近代仏教の多様性を示している。

そうした近代仏教の具体的な歴史を紐解くため、第2章では、幕末期から敗戦までの仏教史を概観している。幕末・維新期では、福田行誠の戒律主義運動や島地黙雷の政教分離運動、明治期では清沢満之率いる「精神主義」と境野黄洋による「新仏教」など「お馴染み」のメンバーが歯切れよく紹介されている。また、大正期の渡辺海旭らの仏教徒による社会事業、大正教養主義と仏教の接点や昭和前期の「マルクス主義と宗教」論争、仏教界全体が戦争へ協力していく道程などが描かれている。

第3章では、より具体的なテーマの中で近代

仏教が論じられている。グローバル化やメデイアの拡大といった当時の最先端とリンクした仏教、部落解放を始めとする社会問題に対応した僧侶、さらには坐法ブームや近代化する葬儀といった新たな実践の登場や儀礼の変容など、近代仏教の世界を幅広く論じている。

第4章「近代仏教ナビゲーション」では、近代仏教者たちの人脈関係図が目を引く。ここでは、宮沢賢治、姉崎正治、北原白秋と国柱会の関係、三井甲之、岩波茂雄と近角常觀有する求道学舎との関係など、近代仏教者たちの人間関係が鮮やかに描かれている。さらに、分野別にまとめられているブックガイドやリサーチマップも丁寧に紹介されており、初学者にとって有益な情報を提供している。また、内藤理恵子による近代仏教徒のイラストもユーモアに溢れており読者の興味を引きつけるであろう。

## 2. 本書の特徴

本書を通読していくと、近代仏教史研究の射程範囲の広さに気づくであろう。

例えば、本書で射程としている時期をみてみると、幕末・維新期(1868年)から昭和前期(1945年)までと広範囲であり、そこでの登場人物は、仏教各宗派の僧侶はもちろんのこと、オカルティストや修養法の実践者までとバラエティに富んでいる。まさに「大谷光瑞から宮沢賢治までさまざまな『濃い』キャラのからまり合うダイナミックな歴史」[ix頁]を多様なテーマのなかで論じている。こうした広範囲かつ多様なテーマが内包している近代仏教史研究の現況を記していることが、本書の最大の特徴であると筆者は考える。

このように本書は、現在の近代仏教史研究における多種多様な成果を包括的に捉えることができる必読書である。

\* 大正大学大学院博士後期課程